



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	移動が再編する地域社会 : ニセコエリアにおける社会的包摂・排除、制度・政策、地域アイデンティティ
Author(s)	新海, 茜
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(観光学)
Dissertation Number	甲第17014号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17014
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100067
Type	doctoral thesis
File Information	SHINKAI_Akane_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（観光学）

氏名：新海 茜

審査委員	主査	教授	山村 高淑
	副査	教授	パイチャゼ スヴェトラナ
	副査	准教授	天田 顕徳
	副査	名誉教授	河合 靖

学位論文題名

移動が再編する地域社会

ーニセコエリアにおける社会的包摂・排除、制度・政策、地域アイデンティティー

本論文は、ニセコエリアを対象として、移動（モビリティ）を基軸に据え、地域社会の再編過程を、歴史的展開、現状分析、制度・政策分析の三側面から多角的に検討し、移動が地域社会にもたらす構造的変容を解明したものである。特に、国際化する観光地域において英語が果たす役割に着目し、英語がリング・フランカとして機能することによって生じる社会的包摂と排除の二重構造を、実証的に明らかにした点に本論文の大きな特色がある。本研究は、言語コミュニケーション論を出発点としながらも、社会開発論的視座や社会文化史的アプローチを導入し、観光研究、地域研究、政策研究を横断する形で議論を展開しており、その独自性は極めて高く、以下の三点から学術的貢献の高さを評価することができる。

第一に、理論的枠組みの構築における学術的貢献である。申請者は、移動に関する社会学的議論や表象論、地域研究の理論を踏まえつつ、移動、言語、制度、地域アイデンティティを相互に関連づける分析枠組みを提示している。とりわけ、移動を単なる流動現象としてではなく、制度や政策、さらには地域イメージの形成と相互に作用するプロセスとして捉え直し、地域がいかに再編されていくのかを統合的に説明する視座を提示している点は評価に値する。その中でも、英語を単なるコミュニケーション手段としてではなく、文化的・制度的文脈の中で作用する要素として捉え直し、言語を媒介とした権力関係の構造を明らかにした点は、従来の観光研究に新たな視座を提供するものである。

第二に、理論的枠組みを具体的事例を通じて実証的に検証している点が高く評価できる。申請者は、歴史資料分析、統計データ、インタビュー調査等、複数の一次・二次資料および調査手法を組み合わせた、いわゆるトライアングレーションによる丁寧な検証により、ニセコエリアにおける移動の実態およびその社会的影響を分析している。その結果、地域住民構造の多層性、言語景観の変容、言語需要の偏在、政策・制度の展開、さらには制度趣旨と現実との乖離といった諸側面を統合的に把握することに成功している。また、時系列的分析と現状分析を接続することで、地域社会の変容を動的に描き出している点も本論文の重要な成果である。加えて、異なる主体間における認識や利害の非対称性を具体的事例を通じて描き出した点も、資料価値が高く、地域社会の実像に迫る上で重要な貢献である。

第三に、本論文の核心的貢献として、英語が一方では多国籍環境におけるコミュニケーションの媒介として社会的包摂を支える一方で、他方では日本語を媒介とした地域への同化を志向する主体に対して排除的に機能するという、相反する二重の作用を明らかにした点が挙げられる。この知見は、英語をめぐる言語的状況を単なる国際化の進展としてではなく、言語を媒介とした文化的ヘゲモニーの再生産という観点から捉え直すものであり、観光地域における言語と権力の関係を実証的に示した重要な成果である。さらに、本論文が指摘する「反転したオリエンタリズム」に関する議論は、日本社会における〈国際＝英語〉という認識の歴史的背景の一端を示唆するものであり、観光研究にとどまらず広く社会科学的議論に接続しうる理論的射程を備えている。

以上のように、本論文は、移動を軸とした地域社会の再編を理論的かつ実証的に明らかにするとともに、言語を媒介とした包摂と排除の構造を提示した点において、学術的貢献度、新規性、独自性のいずれにおいても高く評価できる。また、地域社会を単一の主体として捉えるのではなく、多様な主体の相互作用として把握し、その内部に潜在する非対称性を明らかにした点も、本論文の重要な意義である。さらに、観光地の国際化をめぐる議論に対して、言語という視点から新たな分析軸を提示した点においても、今後の関連研究の展開に資する知見を提供している。

一方で、口頭試問においては、理論的枠組みに関して、特定の理論への依拠の程度やその相対化の必要性、ならびに本研究における概念の独自性の提示のあり方について、さらなる検討の余地があるとの指摘がなされた。また、本論文で提示された重要な知見を、より明確に理論的貢献として位置づけることで、研究の独自性を一層強調できるとの意見も示された。

しかしながら、これらの指摘はいずれも本研究の価値を損なうものではなく、申請者の今後の研究の発展に資する建設的助言である。これらに対し、申請者は適切かつ誠実に応答しており、研究内容に対する十分な理解と主体的な姿勢が確認された。

以上を総合的に勘案し、審査委員会は、本論文が博士（観光学）の学位申請論文として十分な水準を有していると判断し、合格と認めるものである。